



辻浩和

は、日常的にも豊かな音で満たされていたとみられる。

音に満ちた中世の神社

これまで2回にわたり、春日若宮における女性芸能者の様子を紹介してきた。今回はその舞台となった春日若宮や、中世の神社について考えてみたい。

関西圏では春日若宮と聞けば、毎年12月に行われる「おん祭」を思い浮かべる方が多いだろう。神様を本殿からお旅所へと移す神輿は、鋭い乱声（前奏曲）の音と共に動き出し、神輿に従う人々の「おおー」という警蹕の音が暗闇にこだまする。お旅所では神楽、東遊、田楽、細男、猿楽、舞楽など多くの芸能が奉納される。音に満ちたこの祭礼は、12世紀にさかのぼる。

ただ、春日若宮が音で満たされていたのは、何も特別な祭礼の時ばかりではない。中世、若宮拝殿の巫女たちは、参詣者の依頼に応じて日常的に神楽を舞い、彼らの願いを神様に取り次いだ。巫女たちはまた、白拍子舞や乱拍子などの流行芸能を行うこともあり、時に猿楽すら演じたという。若宮拝殿に白拍子女が所属していたことは既に紹介した。さらに遊女もまた、拝殿の構成員だった。遊女たちは恐らく、今様などの流行歌謡を奉納したのであろう。

春日若宮は、日常的に芸能者が集まる場所でもあった。盲人女性が早歌を歌ったことは前回述べたが、他にも獅子舞や田楽、猿楽、ササウすり、人形操り、絵解き法師、琵琶法師など、境内には様々な芸能者が現れた。笛や鼓の音、滑稽な喜劇をみた観客の爆笑、ジャツジャツというササラの音、人形を動かす、絵を指し示しながら語る声、哀切な琵琶の音色。にぎやかな境内の様子が想像される。

このように中世の春日若宮



中世の春日若宮拝殿の様子。社殿の前で少年が今様を歌い、拝殿の巫女たちの背後には箏（そう）と鼓が置かれる＝「春日権現験記」巻13、板橋貫雄による模写、国会図書館デジタルコレクションから

春日若宮が特別なのだろうか。同じ鎌倉時代に奈良盆地の西部、現在の広陵町にあった箸尾満鳴弁才天を取り上げて、その音の風景を復元してみたい。

箸尾弁才天は現在、櫛玉比女神社と呼ばれる古社で、1284年に吉野の奥にある天河弁才天を勧請して成立した。弁才天信仰の高まりを受けて、中世には随分大きくなったらしい。弁才天社を管理した社僧たちは、毎日経巻を転読し、陀羅尼を唱えた。神社には古いをする巫女が所属し、参詣者の要望に応じて神楽も奉納したらしい。

願い込めた舞 神につながる

学問と芸能の神である弁才天には、訪れる芸能者も多い。1292年に千部の法華経を転読する大イベントが行われて以降、毎年十一月には大和国中の持経者が集まったという。弁才天について記した経典の講義が行われることもあった。

1295年には、大和国の有名な管絃者たちが集まって雅楽を奉納している。

遊女梅王は、盗賊にさらわれて自由を奪われた時、またいつたん死んで地獄に落ちそうになった時、弁才天によって救われた。そこで梅王は返礼のため大和国中の遊女を集め、そろいの衣装で様々な芸能を奉納した。

箸尾満鳴弁才天社もまた、音に満たされた空間だった。こうした神社のあり方は、中世にはむしろ普通だったのではないか。

現代の私たちは、神社の静謐さの中に、神秘的な力を感じることが多いように思われる。しかし中世の人々にとっては、にぎやかな音楽や舞こそが、神とつながる手段であった。中世の神社に響く多様な音と声、それを取り巻く人々の感嘆やよめきには、中世人の願いや思いが反映される。これらもそれらを一つ一つ読み解いていきたい。（川村学園女子大学准教授）

◆「つれづれ彩時記」は今回で終了します。

2018年9月27日（木）付 朝日新聞 大阪版 夕刊 掲載

承諾番号 18-4705

朝日新聞社に無断で転載することを禁じます